

追悼

「ペシャワール会」現地代表 PMS 総院長 中村哲さん

1946年福岡県生まれ。九州大学医学部卒。1984年よりパキスタンでハンセン病をはじめ貧困層の診療に携わる。2000年よりアフガニスタンを襲った大干ばつ対策として水源確保事業を実施。2003年3月、灌漑水路掘削を開始。水路の拡大により耕作農地が再生され、現在推定15万人以上の難民が帰還している。

※PMS（ピース・ジャパン・メディカル・サービス）医療団体。現在は灌漑水利事業を中心に取り組んでいる。

35年にわたり、アフガニスタンの人々のために、医療支援、用水路建設等に尽力してこられたペシャワール会現地代表でPMS総院長の中村哲さんが、2019年12月4日、アフガニスタンで凶弾に倒れ、逝去されました。享年73歳でした。



共生の時代2001年12月臨時号より

アフガニスタンの人々に寄り添い続けた中村哲さん

当初、医療支援を目的に現地へ赴任した中村さんは、長年続く戦闘、更に追い打ちをかけるように大干ばつの発生によって餓えと貧困に苦しむ人々に出会いました。生命を守るためには、医療

よりまず清潔な「水」が必要だと、井戸を掘り、用水路建設に奔走され、アフガニスタンの人々の支援に取り組みました。用水路建設では、人々の先頭に立ち、自ら重機を操り、泥にまみれて汗を流し、現地の人々に寄り添い続けてこられました。

水路が広がり、荒れ果てた大地が緑豊かな農地として蘇ったことで、多くの人が故郷に戻ってくる事ができました。

20年にわたるペシャワール会との深い絆

2000年、大干ばつに見舞われたアフガニスタンのために支援活動を行

っているペシャワール会と、グリーンコープは出会いました。水が枯れ、栄養失調で多くの子どもたちが亡くなっていく惨状の中、ペシャワール会は、井戸を掘り、「水」を確保し、小麦などの食糧の配給を行う中村さんからPMSを支援してきました。国際社会の支援の力が届きにくい状況にあることを知ったグリーンコープは、ペシャワール会の活動に連帯し緊急支援カンパに取り組みました。

2001年10月にはペシャワール会事務局の福元満治さんを招いて「アフガニスタン緊急支援集会」を開催しました。12月に発行した共生の時代臨時号の中で、中村さんは「現地レポート」として次のように報告しています。

「いまこそ人間にとって共通に守らなくてはならないものは何かと、真剣に考える時期です。私たちは命を大切にすることを見出すことができた。」

「安心して暮らせる世界を築くために、政治的立場を超えて何かを求めようか。」

2005年12月、中村哲さんを招いて講演会を開催

「同時多発テロ」後、理不尽な理由でアフガニスタンが空爆を受けて4年

が現地での活動の支援を継続していくことに連帯し、2006年1月募金活動に取り組みます。それに先立ち、福岡市と岡山市で講演会を開催しました。

「支援というと、困った人を助けてあげるという感覚で捉えがちですが、教えられることの方が多くのように思います。金や武力さえあれば身を守るというのは迷信です。現地の子供たちははつらつとしています。人間が最後の最後まで持つておかなければならないものは何なのかについて目が開かれた気がします。日本はあまりに豊かになりすぎて大事なものを失いつつあるように思えてなりません。」

アフガニスタンから世界を見つめる中村さんの言葉が、共生の時代2006年1月号に記されています。

2008年4月、シャボン玉フォーラム in 福岡でも講演

中村さんはフォーラムの中で、「生命の水」をテーマに基調講演を行いました。

「平和の基礎は、人々が水を得て安心して自然と同居しながら平和に暮らせることだと思っています。それを実証したい。」

2016年9月、グリーンコープも実行委員会メンバーとして参加した「2016九州・沖縄協同集会」では、中村さんが基調講演を行いました。最後の質疑応答で、「平和のために私ができることは何でしょうか」という子どもからの質問に、すぐさま次のように答えられました。

「自分の周りの人と仲良くすること、大切にすることです。」

2019年9月、グリーンコープでの最後の講演会となりました

中村さんは、アフガニスタンでの水利事業を、福岡県朝倉市の山田堰の工法を参考にすすめられていました。九州北部豪雨災害で被災した朝倉市の方々の支援を続けるグリーンコープ生協福岡おは、中村さんを招いて講演会を開催しました。本当に大切なものは何か、中村さんはいつも私たちに問いかけてくださ

いました。「いつも皆さんに訴えるのは、和解することの大切さ。人間と人間が和解するのはもちろん、人間と自然が折り合っていないと、我々の将来は明るいものにならないでしょう。」

講演会について報告した共生の時代2019年11月号からの抜粋です。福岡おかが主催した講演会終了後、中村さんは次のように語られ、それが私たちへの最後のメッセージとなりました。発言された内容をそのまま掲載します。

「食べものの問題は大きなテーマである。グリーンコープは良き理解者であり、組合員さんは意識が高い。今後みんなで知恵を出し合って続けてほしい。10年後も方針を変えず、幸せになれるようにやらなくてはならない。グリーンコープならできると思う。」



No.137

「～子どもたちへの贈り物～」

「生命を守りたい」「暮らしを守りたい」「みどりの地球をみどりのままで、子どもたちに手渡したい」という私たち組合員の願いと、原発は相反しています。このことは、チェルノブイリ原発事故からも、東京電力福島第一原発事故からも明らかです。

原発の多くは、自然豊かな地域に立地します。その地域には、電源三法交付金制度により経済振興効果がもたらされます。雇用も生まれ、税金も増えますが、全ては暮らしの安心・安全、そして生命と引き換えです。

「ただ歴史を学ぶのではなく、未来をどうするか視点で歴史を捉えることが大切」。これはグリーンコープの平和の取り組みで心に残った言葉ですが、日本のエネルギー政策にも同じことがいえるのではないのでしょうか。

ドイツを筆頭に、欧州では既に自然エネルギーに大きく舵を切っています。日本では3.11後、原発を停止しても電気の供給が滞ることはなく、原発に頼る必要はないことが実証されています。

生命や暮らしを大切にすることを子どもたちに手渡すために、私たち一人ひとりができることから脱原発を実現しましょう。

グリーンコープ共同体組織委員会

		グリーン未来ソーラー売電量 35,342kWh <small>定格出力376kW(110世帯相当)</small>	
2019年10月の売電量		神在太陽光発電所売電量 96,630kWh <small>定格出力1,057kW(309世帯相当)</small>	若宮物流センター太陽光発電所売電量 2,855kWh <small>定格出力47kW(14世帯相当)</small>
グリーンコープ・グリーン電力出資金 11,690人 1,118,490,000円 (2019年11月26日現在)		平池水上太陽光発電所売電量 107,838kWh <small>定格出力1,260kW(368世帯相当)</small>	広島物流センター太陽光発電所売電量 4,201kWh <small>定格出力47kW(14世帯相当)</small>
<small>「原発の電気ではなく、自然エネルギーでつくった電気を使いたい」という願いをかなえるために、グリーンコープ・グリーン電力出資金に協力しましょう</small>		深年太陽光発電所売電量 171,189kWh <small>定格出力1,550kW(453世帯相当)</small>	グリーンコープやまぐち生協西郷地区太陽光発電所売電量 4,623kWh <small>定格出力54kW(16世帯相当)</small>